

はじめに：本書の目的と構成

庄田慎矢(奈良文化財研究所／ヨーク大学)

本書は、2018年1月27日・28日に奈良文化財研究所平城宮跡資料館(奈良市佐紀町)にて開催された国際シンポジウム「アフロ・ユーラシアの考古植物学 *Afro-Eurasian Archaeobotany: New perspectives, new approaches*」において行われた11の講演の内容とともに、関連する内容を扱う論文4編を増補し、一書として編んだものである。このシンポジウムは、日本の考古学界にはあまり知られていないアフリカ、ヨーロッパ、そして東アジアだけでなく西アジアや中央アジア、すなわちアフロ・ユーラシアの各地で繰り広げられているさまざまな人たちの考古植物学ないし植物考古学の研究を日本に紹介するとともに、日本で行われている考古植物学的研究の現状を海外の研究者と議論する場を設けようという意図によって開催された(図1)。

このうち後者の部分は、編者が英国ヨーク大学に在籍中の2016年2月5日に同大学において開催したセミナー *Japanese Archaeobotany* (図2)の続編とも言えるものである。このセミナーには、本書にも寄稿してくださった能城修一・那須浩郎・佐々木由香の各氏のほか、世界的な考古植物学者であるドリアン・フラー(Dorian Q. Fuller)氏からも話題提供をいただいた。このワークショップでの感



図1 国際シンポジウム「アフロ・ユーラシアの考古植物学 *Afro-Eurasian Archaeobotany: New perspectives, new approaches*」当日の様子(栗山雅夫撮影)

想は、日本で行われている研究に対する海外での関心は、意外なほど高い、ということであった。

一方で、編者の知るかぎりにおいては、欧米圏で行われている考古植物学的研究の諸事例からは、出土植物遺体の属・種の同定や記載、計量、編年的位置づけに重きを置く日本の研究の方向性とは若干異なるイメージを受ける。植物遺体を遺跡に残した人々と生態系とのかかわりや、生業のあり方との関連性、そして実験的手法や民族誌調査によって得られる脈絡の解釈への援用の傾向がより強く、そして安定同位体や生体分子を対象とした新しい研究手法を積極的に導入しているのが例として挙げられるであろうか。本書では、こうした視点から、地理的な観点からだけでなく、方法論という面からも、多様な研究事例を集めることを試みた。基調講演を引き受けてくださったエイミー・ボガード氏の研究は、まさに上記の多角的アプローチを体現するものである。すなわち、出土種子の同定に基づく雑草植物相の復元という考古植物学の古典的な王道を進みつつ、一方で穀物の炭素・窒素安定同位体比という新しい研究手法の利点を存分に活かし、さらにこれらを論理的に解釈するための実験的研究や民族誌調査を実践している。こうした多角的アプローチは、本書の縮図といっても過言ではないであろう。

ところで、21世紀にはいり、考古植物学の対象とする範囲が顕微鏡レベルを超えたミクロの世界に大きく広がってきた。これは、上記の炭素・窒素安定同位体比や他の元素の同位体比を用いた研究だけでなく、DNAやタンパク質、脂質といった生体分子を考古遺物から取り出す技術が格段に進歩したことで、イネをはじめとする植物遺体はもちろんのこと、今まで対象としてこなかった、土壌や土器胎土のなかの微量な証拠をもとにさまざまな議論がなされるようになったのである。本書では、こうした研究事例のほとんどが英文でしか発表されていない現況を鑑みて、編者自身の研究を含め、現在さかんに進められている新しい試みについても紹介を試みた。無論、こうしたミクロな試料が蓄積される一方で、そ

The poster features a background image of a stone torii gate. Text on the poster includes the title 'Japanese Archaeobotany', the date '5th February 2016, University of York', and the location 'King's Manor, K/111'. A list of speakers and topics is provided, such as 'Introduction' by Shinya Shoda and 'Emergence of a sophisticated subsistence system on plant resources in a pre-agricultural Jomon society in Japan' by Shuichi Noshiro. Logos for Marie Curie Actions, the Society for the Promotion of Science, and Tasuki are also present. A map of the University of York campus is shown in the bottom right corner.

Japanese Archaeobotany
5th February 2016, University of York
King's Manor, K/111
14.15-16.15

14.15 *Introduction*
Shinya Shoda (BioArCh, University of York)

14.20 *Emergence of a sophisticated subsistence system on plant resources in a pre-agricultural Jomon society in Japan*
Shuichi Noshiro (Forestry and Forest Products Research Institute)

14.45 *Traces of human use deduced from plant remains of the Jomon period*
Yuka Sasaki (Paleo Labo Co., Ltd.)

15.10 *New evidences of domestication of soybean, azuki bean and barnyard millet in Jomon culture, prehistoric Japan*
Hiroo Nasu (SOKENDAI: The Graduate University for Advanced Studies)

15.25 *Crops across the East China Sea: Early domestications and translocations of crops to east, west and south*
Dorian Fuller (UCL Institute of Archaeology)

15.50 *Discussion*

Entrance is free, though space is limited, so please let us know in advance if you wish to attend by emailing Dr Shinya Shoda at shinya.shoda@york.ac.uk

図2 2016年2月5日に英国ヨーク大学で行われたセミナー Japanese Archaeobotany のプログラム